

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会-第四十五号

Jeff Pippenger

2026-02-12

第四十五番

書評

レビ記二十三章は、十四万四千人の五旬節期における三つの試練を指し示している。仮庵の祭りの第一日を五旬節の日に対応させ、さらに、キリストが御昇天に先立って弟子たちに対面して教えられた四十日間を初穂の日に対応させることによって、三天使のメッセージを表す包括的な構造が形成される。

「死、埋葬、復活」が、キリストのバプテスマにおいて表象されているとおり、三段階から成る一つの預言的道標として適用されるとき、初穂の日に起こった復活から五日後に、七日間の種入れぬパンの祭りの終わりが聖会として到来することが見いだされる。したがって、初穂のささげ物と一致するキリストの復活の時点から、五日の期間が続く。

仮庵の祭りの初日を五旬祭の日を重ね合わせて成立する構造の終わりには、三段階から成る別の道標があり、同様に五日が続いて五旬祭に至る。

その二つの「三段階の道標の後に五日が続く」のあいだには、三十日の期間がある。仮庵の祭りの初日を五旬節の日と対応させると、仮庵の祭りの五日前が贖罪日であったことが分かる。贖罪日の十日前はラッパの祭りであった。初穂の日に御復活なさったのち、キリストが対面して教えられた四十日は、ラッパの祭りの五日後、また贖罪日の五日前に位置づけられる。

彼の「死、埋葬、復活」という三段階の道標が立てられ、その後、種なしパンの祭りの終わりに至る五日間が続く。これは三十日後に再び繰り返され、今度は「ラッパ、昇天、裁き」という三段階の道標が立てられ、その後さらに五日を経て五旬祭（ペンテコステ）に至る。最初の三段階の道標は、三つの段階を備えた一つの道標として容易に定義できる。というのも、それは彼の「死、埋葬、復活」を象徴するキリストのバプテスマと、そのようなものとして直接に同定されているからである。そのバプテスマは、聖なる1,260日の期間に対するアルファであり、その期間は彼の「死、埋葬、復活」において頂点に達し、これがその1,260日に対するオメガであった。

ペンテコステ期の終わりにある三段階の道標は、預言的適用によって認識されなければならない。ペンテコステ期の五十日の中には、冒頭と末尾の双方に同一の構造が見出される。キリストは常に初めによって終わりを例証されるという原則に基づけば、ラッパの祭り、次いで昇天、次いで贖罪の日、そして五日間、という、一つの「三段階の道標に続く五日」を同定することができる。

さらに、提案された三段階を、それぞれの段階の特質に関する聖書的指針に照らして検証する。その三段階は、神の御言葉において繰り返し示されている。すなわち、それは三人の御使いであり、外庭・聖所・至聖所であり、また、罪と義と裁きについて人々を責め、悟らせる聖霊の御業である。ラッパの祭り、昇天、そして贖罪日をそれら三段階として特定するためには、各段階が既に確立された聖書の証言と整合していなければならない。

ラッパは警告のメッセージであり、「神を恐れよ」と叫ぶ第一の御使いと結びついている。キリストの昇天は、その再臨の栄光の象徴である。というのも、第一の御使いの第二の表現は「神に栄光を帰せよ」だからである。贖罪日は裁きの象徴であり、第一の御使いの第三の表現は「神のさばきの時が来た」である。ペンテコステ期の終わりにおける道標に示された三つの段階の預言的特性が、永遠の福音の三段階（そこで多くの者が「清められ、白くされ、試みられる」）を表していることは、いくつかの方法で識別しうる。

このようであるゆえ、三段階の最初の道標においては大麦の初穂の供え物がささげられ、その三段階の最後の道標においては小麦の初穂の供え物がささげられることが、あなたには見て取れるであろう。次いで、五旬祭の季節におけるアルファの三段階は種を入れないパンを指し示し、しかし三段階のオメガの道標は種を入れたパンを指し示していることが、あなたには見えるかもしれない。さらには、最初の三段階の道標においては、すべての人を引き寄せるためにキリストが高く上げられ、終わりの三段階の道標においては、異邦人を引き寄せるために十四万四千人の旗印が掲げられることさえ、あなたは見て取ることができるであろう。

預言的次元においては、第一の天使と第三の天使は同一の天使である。というのも、第一は始まりであり、第三は終わりであるからである。アルファたる第一の天使は裁きの開幕を宣布し、オメガたる最後の天使は裁きの終結を宣布する。第一の天使のメッセージは1840年8月11日におけるイスラームの成就によって力を受け、第三の天使のメッセージは9/11におけるイスラームの成就によって力を受けた。ホワイト夫人は、第一と第三の天使の使命が、その栄光によって地を照らすことであつたと私たちに教えている。他の証人も多く、彼らは、キリストの復活から五旬節に至る五十日において、またレビ記二十三章の最初の二十二節および最後の二十二節において示されているとおりの五旬節期の構造を同定するための十分な裏付けを与えている。三つの段階という道標と、その後続く五日という道標という二つの道標のあいだには、第二の天使を表す三十日の期間がある。

「三つの段階の後に五」の日々における第一の道標は第一の天使であり、三十日は第二の天使であり、「三つの段階の後に五」の日々における第二の道標は第三の天使である。これら三つの段階は、ペンテコステに至るまでの五旬祭の季節全体を包括しており、そしてそのペンテコステが、仮庵の祭りの七日間の始まりを画する。この七日間は、アメリカ合衆国における日曜法から始まり、ミカエルが立ち上がり人類の恵みの時が閉じられるに至るまで続く日曜法危機のさなかにおける後の雨の注出を象徴する。構造は神的なものであるが、いくつかの重大な考慮を生じさせる。

真摯な考察

「ラッパ、昇天、審判」によって象徴されるその道標が、リトマス試験にして第三の試験であることは明らかである。第三の試験は常にリトマス試験であり、そこでは品性が顕現するが、決して形成されることはない。

品性は危機によって明らかになる。真夜中に「見よ、花婿が来る。出て行って迎えよ」と切なる声が告げられたとき、眠っていた乙女たちは眠りから目を覚まし、誰がその出来事に備えていたかがわかった。両者とも不意を突かれたが、一方は非常時に備えており、もう一方は備えがないことが明らかになった。品性は状況によって明らかになる。非常時は品性の真価を引き出す。思いがけない災厄、死別、危機、予期せぬ病や苦悶、魂を死と真正面から向き合わせるような出来事は、品性の内実を露わにする。神の言葉の約束に対する真の信仰があるかどうか明らかになる。魂が恵みによって支えられているか、すなわち、灯とともに持つ器に油があるかどうか明らかになる。

「試練の時はすべての人にやって来る。神による試みと精錬のただ中で、私たちはどのように振る舞うのか。私たちのともしびは消えてしまうのか。それともなお燃やし続けるのか。恵みとまことに満ちておられる方との交わりによって、私たちはあらゆる非常時に備えているだろうか。五人の賢いおとめたちは、自分たちの品性を五人の愚かなおとめたちに分け与えることはできなかった。品性は、私たち一人ひとりが形成しなければならぬ。」 Review and Herald, 1895年10月17日。

ラッパの祭りの道標が到来するとき、あなたの品性は永遠に封印され、あなたは旗印として高く掲げられ、あなたの罪は永遠にぬぐい去られる。三つの段階は、封印の三つの側面を表している。真夜中の叫びのメッセージの到来は、油を備え、その罪が取り除かれるにしたがって旗印として高く掲げられる者たちを明らかにする。メッセージ、働き、そして封印は、すべて一つの道標である。それは、「予期しなかった災厄」のゆえに「魂を死と真正面から向き合わせる」道標である。イスラムのラッパは、その「予期しなかった災厄」を象徴している。その時、「見よ、花婿が来られる」とのメッセージが日曜法に先立つ五日前に宣言され、そして日曜法に至ると、メッセージは第三天使の大いなる叫びへと転じる。

道標における三段階は、日曜法の直前における十四万四千人の封印と高挙を識別するための諸要素である。『ラッパ・昇天・裁き』という試金石は、エクセターのキャンプ集会によって表象されている。贖罪日と五旬祭の間の五日間は、8月17日に終結したエクセターのキャンプ集会から、戸が閉ざされた1844年10月22日に至るまでの66日間を表している。そのミラー派の歴史の66日間は終わりの日々を例証しており、この点において、十四万四千人による真夜中の叫びのメッセージの宣布を例証している。

ペンテコステまでの五日間は、ミラー派が「真夜中の叫び」のメッセージを宣べ伝えた六十六日間と符合しており、しかもこの「真夜中の叫び」は、キリストのエルサレムへの凱旋入城によっても予表されている。三つの段階の第一はラッパの祭りであり、それは第七のラッパ、すなわち第三のわざわい、すなわち終末時代のイスラムに当たる。また、キリストの凱旋入城に先立っては、一頭のろばが解き放たれた。

預言的に言えば、これは、ろばを解くことが凱旋入城の始まりを画し、その凱旋入城こそが「真夜中の叫び」であることを指し示している。聖書預言は、終わりの日において、聖書預言の第六の王国-地から上ってくる獣、すなわちアメリカ合衆国-に適用されるべきである。イスラムは、9/11のときにそうしたように、アメリカ合衆国を打つであろう。こうして、イスラムによるアメリカ合衆国への重大な一撃をもって「真夜中の叫び」の宣言の開始が画され、さらに、イスラムによるアメリカ合衆国への別の重大な一撃をもって「真夜中の叫び」の宣言の終結も画される。というのも、イエスは常に、ある事柄の初めによってその事柄の終わりを例証するからである。

ペンテコステのメッセージは大いなる叫びのメッセージであり、この大いなる叫びは真夜中の叫びのメッセージの単なる強化にすぎない。ミラー派の歴史においては、真夜中の叫びは1844年10月22日に戸が閉じられたときに終わり、終末の時代においては、日曜法において戸が閉じられるときに終わる。ペテロはペンテコステにおいてヨエルのメッセージを宣べ伝えたが、ペンテコステは真夜中の叫びのオメガとしての終結であるゆえ、真夜中の叫びのアルファとしての起点においても、預言的必然性により、ペテロはまたヨエルのメッセージを提示していなければならない。真夜中の叫びにおいて、ペテロは使徒行伝第二章に見るように、第三時に二階の広間におり、その同じ日の第九時には神殿でヨエルのメッセージを宣言している。

ペテロは、真夜中の叫びの終結であるペンテコステにおける十四万四千人の象徴であり、また真夜中の叫びの始まりにおける十四万四千人の象徴でもある。イスラムが打撃を与えるとき、驢馬を解くことによって十四万四千人の封印と興起が始まる。ミラー派がエクセターのキャンプ集会を去ったとき、彼らはそのメッセージを津波のように運び、そしてその経験を繰り返す十四万四千人を象徴的に予型した。

この適用は、ペテロが、ペンテコステ期における試金石となる試験と第三の試験において「真夜中の叫び」のメッセージを宣べ伝える者たちを代表していると認識するとき、いっそう重大なものとなる。ペンテコステにおける第三時は、ペテロを二階の広間に置く。そして、その二階の広間はまた、ペンテコステ前の十日間でもある。ペンテコステ期の第二の試験は、基礎の試験に続く三十日間の神殿の試験である。神殿の第二の試験は、忠実な者たちに、信仰によって至聖所に入ることを要求する。そこにおいて彼らの罪は消し去られ、また彼らは信仰によって天にある所でキリストと共に座に着く。使徒行伝は、ペテロが第三時に二階の広間でヨエル書についての説教を始め、その後第九時には神殿にいたことを伝えている。

しかしペテロは、十一人と共に立ち上がり、声をあげて彼らに言った。「ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての者よ、このことを知れ、わたしの言葉に耳を傾けよ。これらの者は、あなたがたが思っているように酔ってはいない。今は昼の第三時にすぎないからである。むしろ、これは預言者ヨエルによって語られたことにほかならない。」…さて、ペテロとヨハネは、祈りの時である第九時に、共に神殿に上って行った。使徒行伝 2:14-16; 3:1.

キリストは第三時に十字架に釘づけにされ、第九時に死なれた。その死・埋葬・復活は、三つの段階から成る一つの道標である。第三の段階である初穂の日は、ペンテコステで結

ばれる五十日の期間の始まりである。ペンテコステの季節のアルファにおいて、第三時と第九時は顕著な対照をなす。というのも、キリストは第三時には生きておられ、第九時には死んでおられたからである。ペテロは第三時には二階の広間におり、第九時には神殿にいた。

キリストの時代における聖なる五十日の五旬祭の季節は、二千三百年の預言に直接結びついた聖なる預言的期間であった。これは、ダニエル書第九章におけるユダヤ民族のための四百九十年の最後の一週と、とりわけ密接に結びついていた。キリストが契約を堅くされたその聖なる一週は、預言的日数である千二百六十日の等しい二期に分割されていた。その一週を中心は十字架であった。十字架は第三時と第九時を指し示し、五旬祭におけるペテロもまた同様に示している。西暦34年、同じその聖なる一週の終わりに、カイサリア・マリティマにいたコルネリウスがペテロを召し寄せたとき、時は第九時であった。

カイサリアにコルネリオという者がいた。イタリア隊と呼ばれる部隊の百人隊長である。彼は敬虔な人で、家の者すべてとともに神を畏れ、民に多く施しをし、絶えず神に祈っていた。彼は日の第九時ごろ、幻のうちに、神の御使いが自分のところに入って来て、「コルネリオよ」と告げるのを、はっきりと見た。彼がその者を見つめると恐れ、「主よ、何事でしょうか」と言った。すると彼は言った、「あなたの祈りと施しは、記念として神の御前に上った。今、人をヨッパに遣わし、ペテロと呼ばれるシモンという者を呼び寄せなさい。」使徒行伝 10:1-5。

翌日、ペテロは第六時ごろ、祈るために屋上に上がった。

翌日、彼らが旅路を進めて町に近づいたころ、ペテロは第六時ごろ、祈るために屋上に上った。すると彼はひどく空腹を覚え、食べたいと思ったが、人々が用意している間に、彼は恍惚状態に陥った。そして天が開け、四隅を結び合わせた大きな布のようなある器が、地上におろされるかたちで彼のもとに下って来るのを見た。その中には、地の四足の獣、野獣、はうもの、空の鳥のあらゆる種類があった。すると彼に声があつて、「起きよ、ペテロ。屠って食べよ」と言った。ペテロは言った、「主よ、決してそのようなことはできません。私はこれまで、俗なるものや汚れたものを何一つ食べたことはありません」。すると声はふたたび、二度目に彼に言った、「神が清めたものを、あなたは俗なるものと呼んではならない」。これが三度行われ、それからその器は再び天に引き上げられた。使徒行伝 10:9-16

ペテロがカイサリアに来るようにとの召しは、第九時、すなわち御使いがコルネリウスに語りかけるために到来したときになされた。コルネリウスは、日曜法においてバビロンから出るように召される神のほかの子らを表している。日曜法に際して到来する御使いは、黙示録十八章の第二の声であり、なおバビロンにいる者たちに逃れ出るよう呼びかける。ペテロは十四万四千人を、コルネリウスは第十一時の働き人たちを表しており、この働き人たちはペテロには汚れた動物として示されている。ペテロとコルネリウスの関係は、黙示録七章における関係であり、そこでは十四万四千人が大群衆との関連において同定される。ペテロは「立って、屠って、食べよ」と三度命じられた。十四万四千人としてのペテロにとって、コルネリウスからの召しは、旗を立てよとの命が下るところである。

コルネリウスはカイサリア・マリティマ、すなわちしばしば「海辺のカイサリア」とも呼ばれる地にいる。黙示録一七章は、「水」が「もろもろの民、群衆、諸国民、諸言語」であることを告げている。水は神の教会の外にいる者たちを指す。また、黙示録においても、ペテロの汚れた獣の幻においても、数「四」は全世界を表す。ペテロの幻には四種の獣が現れ、それらは四隅でつり下げられた一枚の布にあって降りて来る。ペテロとコルネリウスの関係は、ノアと箱舟に乗り込んだ獣たちによっても表されている。

ペテロはヨッパにいた。そこは「輝かしく美しい」を意味する。というのも、十四万四千人の象徴としてのペテロは、異邦人に対する輝かしく美しい旗印だからである。第九時に、異邦人はその旗印に目覚める。ホワイト姉妹はその旗印を、安息日、神の律法、第三天使のメッセージ、そして世界中にいる、終わりの日のメッセージを携える宣教師たちであると同定している。海辺のカイサリアで第九時に御使いが到来したとき、コルネリオはその旗印に目覚めた。その後、五旬節の日曜法におけるそのメッセージは、世界-すなわち海-へと向かう。

旗印が掲げられることは、主の家が諸山の上に高く掲げられることとしても表象されている。また、ペテロは、美しく輝く都ヨッパにある家の屋上で、第九時の日曜法の直前に当たる第六時に祈っていた。十四万四千人が封印されるとき、世界の危機の様相が、なおバビロンにとどまっている神のほかの子らを、光を求めるようにと駆り立てる。彼らは導かれて、ヨッパの家の屋上にいるペテロを見いだす。

ペトロは、マタイ16章でも、カイサリア・フィリピにいた。ヘルモン山麓のカイサリア・フィリピは、海辺のカイサリアと同名であったが、一方は陸にあり、他方は海にあるという明確な対照をなしていた。キリストが第三時に十字架につけられ、第九時に息を引き取られたことは、生と死の明確な対照を示している。五旬祭の第三時と第九時におけるペトロは、二階の広間から神殿へと至る明確な対照を示している。陸にあるカイサリアにせよ海にあるカイサリアにせよ、第三時と第九時という必須の預言的対照を表している。しかし、ペトロがカイサリア・フィリピにいたときには、第三時への直接の言及はない。二人または三人の証しによって事は確立される。そして、十字架における第三時と第九時、さらに五旬祭の日における第三時と第九時という二つの挿例は、いずれも一人の人物によって表されている。すなわち、十字架においては生けるキリストであれ墓におられるキリストであれ、また五旬祭においては二階の広間にいるペトロであれ神殿にいるペトロであれ、そのいずれか一人がそれを体現しているのである。

二つのカイサリアにおける第三時と第九時の第三の証しは、両場合において主要人物がペテロであることを示している。これは、五旬節期の初めにはキリストが、そして同じ期の終わりにはペテロがそうであったのと同様である。第三時のアルファの人物は第九時のオメガの人物と同一であり、これが、二つのカイサリアのアルファがカイサリア・フィリピであることの一つの証しとなる。第二の証しは、両市の名称が同一であることであり、したがって主要人物の名と都市の名が同一であるということである。第三の証しは、陸と海の対比である。ペテロがカイサリア・フィリピにいたとき、それは第三時であった。ここで、このメッセージはいっそう重大さを増す。

同名の二つの都市を対応づけるのは正しい。我々もまさにそれを行っているが、同時に、十字架におけるキリストの証しと五旬節におけるペテロの証しに基づいて、第三時と第九時を適用に組み込んでいる。三本の線-キリストの第三時と第九時、五旬節におけるペテロの第三時と第九時-を一つに収斂させることによって、カイサリア・ピリピにおける第三時を確立する。全く同一の預言的論理を、第九時のコルネリオ、第六時のペテロ、そしてカイサリア・ピリピにおける第三時のペテロに適用すべきである。

ペテロは三つの道標すべてに関与している。コルネリウスは第六時と第九時にはペテロと共にあるが、カイサリア・ピリピにおける第三時には共にいない。この線は、各段がそれぞれ、カイサリア・ピリピの第三時、ヨッパの第六時、カイサリア・マリティマの第九時に当たることによって結び合わされている。両カイサリアはいずれもその文化的根源をギリシアとローマの双方に負っていたが、カイサリア・ピリピの特質は辺境的かつ神秘的な異教の具現であり、海辺のカイサリアはギリシア文化とローマの統治を融合させた商業・行政の中枢であった。カイサリア・ピリピは教権の象徴であり、カイサリア・マリティマは国家統治術の象徴であった。

カイサリアからカイサリアへ至る道程において、ヨッパは三つの段階のうちの中間の段階である。三つの段階は第三時・第六時・第九時によって表されている。第九時の海辺のカイサリアは、福音が異邦人に及ぶとき、すなわち日曜法令である。その三時間前、すなわち第六時には、ペテロは明るく輝く都ヨッパにいる。さらにその三時間前、第三時には、ペテロはラッパの祭りにいる。カイサリアからカイサリアまでが真夜中の叫びの期間である。ペテロは、初めから終わりに至るまで真夜中の叫びを宣べ伝える者たちを表している。というのも、イエスは常に初めを終わりと一致させるからである。真夜中の叫びは、ラッパの祭りの道標においてろばが解き放たれることから始まり、そこでペテロはヨエルのメッセージを宣べ伝えている。

ペテロは、ラッパの祭り、昇天、そしてそれに続く審判という三段階の道標のところにいる。マタイ16章におけるその道標において、キリストが何者であるかという問題が提起される。ペテロの名は変えられ、キリストは「この岩の上にわたしの教会を建てる」と宣言する。神殿がその上に建てられる岩は土台であり、カイサリア・ピリピにおけるペテロは第一の天使のメッセージであって、それは基礎となるメッセージである。ペテロが次の段階に至ると、ヨッパにおいて、四十日にわたる面と向かっての教えの終わりにキリストがなされたように、彼は昇天する。昇天はまた、救済史の主要な旗印である十字架に並行するものであり、十字架は、二人の盗賊、至聖所へと通じる垂れ幕の裂け、そして暗闇と時刻とともに、二つの部分に分割されている。

第六時から第九時に至るまで、全地に闇があった。第九時ごろ、イエスは大声で叫んで言われた、「エリ、エリ、ラマ・サバクタニ」。これは、「わが神、わが神、何ゆえにわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。マタイによる福音書27章45、46節。

ヨッパにおいて、第六時に、ペテロは、失われた者と救われた者の間、光と闇の間、そして「真夜中の叫び」の始まりと終わりの間に位置する、予言的な分岐点に立たされている。その断絶は、十四万四千人のラオデキヤ的運動から十四万四千人のフィラデルフィ

ア的運動への移行を強調している。それは、ラオデキヤ状態にあるセブンスデー・アドベント教会の完全な拒絶を画している。贖罪日により表象される裁きの閉じられた戸は、五旬節的な日曜令の五日前に到来する。その裁きに先立って昇天があり、そのさらに前にラッパのメッセージがある。これら三つの段階は、神の印が押される道標を表し、勝利の教会がコルネリオに代表される者たちに向けて「真夜中の叫び」のメッセージを宣明するところを示している。

ペテロは五旬祭にそのメッセージを宣べ伝え、五旬祭は真夜中の叫びのメッセージの終結を画する。ゆえに、予言的必然として、ペテロは真夜中の叫びの期間の始まりにおいてもまたそのメッセージを宣べ伝えるのである。始まりは常に終わりの型を示す。イスラムのロバが解き放たれてアメリカ合衆国を攻撃するとき、すなわち日曜法の時にそれが再び起こると同様に、ペテロの真夜中の叫びのメッセージは力を与えられる。五旬祭の第三時と第九時にペテロがそのメッセージを宣べ伝えることは、真夜中の叫びの始まりと終わりを指し示す。

私たちが考察している系列において、キリストの昇天で終わる四十日間は、同時に屋上の間における十日間の始まりでもある。十日間のうち五日目に、贖罪日は、イスラエルの罪がぬぐい去られ、教会が自らの備えを整えたことを示す。五旬祭において、第三時にペテロは屋上の間にいた。日曜法の第九時に、メッセージは真夜中から大いなる叫びへと変わる。

「真夜半の叫び」のメッセージの宣布は、第三時においてペテロによってなされる。そのメッセージは、ラッパの祭り、ろばが解き放たれる時、そしてカイサリア・ピリピによって標づけられており、しかもカイサリア・ピリピはパニオンでもある。パニオンは、ダニエル書十一章十三節から十五節において表象されている。ペテロは、「真夜半の叫び」の宣布の冒頭においてろばが解き放たれる時に、アメリカ合衆国に対するイスラムの一撃を指し示しているだけでなく、同時に、日曜法へと導くパニオンの戦いのただ中にいる。パニオンの戦いは、アメリカ合衆国に対するイスラムの一撃と並行する出来事である。

これらの内容は次回の記事で続けます。